

[研究論文]

海外旅行の実施状況と意識へのライフステージの影響

—日本人の海外旅行“消極派”の分析—

中村 哲

〈要 約〉

本論文の目的は、第1に、日本人の18-49歳の海外旅行の実態を、ライフステージとの関連で明らかにすることである。第2に、海外旅行に対して消極的な人の意識の特徴を示すことである。

国内外の先行研究・調査を見ていくと、幅広い年代を対象とした旅行の実態の把握が行われており、ライフステージ、家庭のライフサイクルが旅行行動や消費金額に影響していることが認められている。特に、子どもがいない夫婦や子どもが独立した夫婦が頻繁に旅行を行い、多くの金額を使っている一方で、独立していない子どもがいる夫婦では、旅行に投下できる裁量所得と子どもの制約のために旅行をしていないことが明らかになっている。しかし、子育て中のライフステージにあり海外旅行に対して消極的な人の意識についての研究は少ない。日本人の年間海外旅行者数が伸び悩んでいる中で、海外旅行者数の拡大を図るためには、海外旅行に対して消極的な人の意識を理解することが必要である。

研究方法は、2013年に実施した海外旅行の意識・実態に関するインターネットを用いた量的調査の結果を分析することである。18-49歳の日本人3069名の回答の分析を行った。

海外旅行の実態について、まず、過去の渡航経験と今後の実施意向に基づいて“参加者”“希望派”“消極派”“否定派”に回答者を区分したところ、“消極派”が4割を占めていることがわかった。さらに、“消極派”について海外旅行の実施状況を踏まえて「アクティブ」「休眠」「経験なし」の3つに細分化した結果、末子年齢が未就学児以上のライフステージにある人では「休眠」の人の比率が高いことが示された。一方、独身者の場合は「経験なし」の比率が高い状況であった。

次に、“消極派”の意識を、過去の海外渡航経験の評価、現在の海外旅行への関心、海外旅行への阻害要因の評定を基に把握した。分析の結果、海外渡航経験者の場合はライフステージによる差異が見られ、特に、既婚者で子どもがいる人は、海外旅行に対して比較的ポジティブな印象を持ち、現在もなお関心を示していると同時に、家庭の状況や金銭・時間の不足といった構造的阻害要因、同行者の確保という対人的阻害要因が大きいことが示された。一方、渡航経験のない人については、渡航経験のある人よりも経験評価や関心が全体的に低いこと、ライフステージによる関心の程度、阻害要因の知覚の程度に差異がないことが示された。

最後に、旅行業の実務への示唆と今後の研究課題について検討を行った。

キーワード：観光行動、海外旅行、量的調査、ライフステージ、消極派

1 研究の背景と目的

1-1 研究の経緯

筆者はこれまで、観光行動論の立場からの“若者の海外旅行離れ”についての研究に参画してきた(中村・西村・高井, 2014)。この研究では、主として20歳代の日本人の若者の出国率¹⁾が、1990年

代半ばから後半の時期に比べて2000年代後半に低迷した現象を「若者の海外旅行離れ」として位置づけた上で、若者がどのような阻害要因を知覚しているのか、またその知覚の変化にはどのような要因が影響しているのかについて明らかにするものであった。その成果の1つとして提起したのが「海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル」である（西村・高井・中村，2014）。

現在は、上記モデルを土台とした観光行動の一般的意思決定プロセスに関するモデルの提案に着手している（高井・中村・西村，2013）。ここでは、若者の海外旅行だけでなく、対象を他の年齢層に拡張し、国内旅行にも適用可能なモデル構築を目指している。そのため、“若者”ではない年代の旅行行動の特徴を把握するための分析に取り組んでいる（中村，2014b）。

1-2 統計に見る出国率の動向

ここで、各年の出国者を人口で除して比率化した数値である出国率の動向を確認していく。図1は、2013年の年齢別の出国率を示したものである。女性については20-24歳で28.0%、25-29歳で29.6%と、20歳代が出国率のピークとなっているが、30歳代以降は低下し、45-49歳で13.7%となっている。一方、男性については、20-24歳で13.6%となっているが、徐々に上昇し、45-49歳では27.8%に到達している。

次に、コホート別の推移を見ていく(表1)²⁾。まず、1963～1967年に生まれた人の出国率の推移を5年間隔で見えていくと、女性について最も数値が高かったのは、この年代が25-29歳であった1992年で23.7%を記録した。以後は数値の低下が続き、この年代が40-44歳であった2007年には13.0%となった。しかし、2012年には14.7%とわずかに回復している。男性を見ていくと、年齢が増すとともに出国率が増加しており、2007年（40-44歳）、2012年（45-49歳）には28%に達している。

次に、1968～1972年に生まれた人の出国率を見ていくと、女性については、25-29歳であった1997年に最も高い出国率（33.4%）を記録している。しかし、30歳代以降は出国率が徐々に低下し、40-44歳となった2012年には14.7%となっている。男性については、20歳代後半から出国率が20%台に

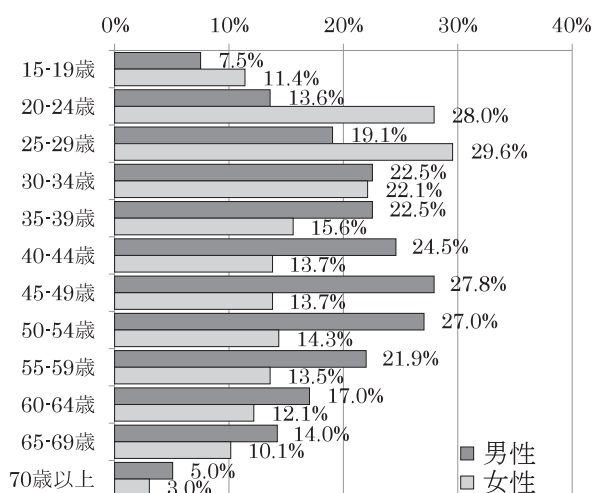


図1 2013年の日本人海外出国率

表1 コホート別の出国率推移

	1963～1967年生			1968～1972年生			1973～1977年生		
	年	男性	女性	年	男性	女性	年	男性	女性
15-19歳	1982	0.8%	1.1%	1987	1.6%	2.5%	1992	3.6%	5.3%
20-24歳	1987	6.7%	13.4%	1992	11.2%	21.9%	1997	13.3%	27.9%
25-29歳	1992	20.2%	23.7%	1997	22.3%	33.4%	2002	18.0%	27.2%
30-34歳	1997	25.3%	19.7%	2002	22.1%	20.0%	2007	20.9%	19.4%
35-39歳	2002	24.4%	13.9%	2007	24.3%	15.1%	2012	23.1%	16.4%
40-44歳	2007	28.4%	13.0%	2012	25.9%	14.7%	—	—	—
45-49歳	2012	28.8%	14.7%	—	—	—	—	—	—

達し、2012年（40-44歳）には25.9%となっている。

さらに、1973-1977年に生まれた人についても見ていくと、女性では20-24歳の時（1997年）には27.9%、25-29歳の時（2002年）には27.2%を示したが、35-39歳となった2012年には16.4%と10ポイント以上低下している。一方、男性については、20-24歳であった1997年には13.3%であったが、2012年には23.1%まで増加している。

このように見ていくと、年代による違い（コホート効果）が見られるものの、女性の出国率は20歳代後半がピークとなっており、30歳代以降は低下していくことが共通している。一方、男性の出国率については、20歳代前半までは同年代の女性よりも低いものの、ビジネスを目的とした渡航が発生することも影響し、20歳代後半以降は徐々に高くなっていく傾向がある。20歳代のいわゆる若者年代と、30歳代以降の年代とでは、海外旅行の実施状況が大きく異なると考えられる。

1-3 日本の民間調査機関による海外旅行の調査

日本の民間の調査機関が毎年実施・公表している海外旅行の調査としては、『JTB REPORT』（ツーリズム・マーケティング・研究所）、『Market Insight』（公益財団法人日本交通公社）、『エイビーロード海外旅行調査』（リクルートライフスタイル・エイビーロード・リサーチ・センター）がある。

『JTB REPORT』では性別・年齢ならびに婚姻状況を切り口とした分析がされており、「男子学生」「女子学生」「未婚女性（15-29歳）」「未婚女性（30-44歳）」「有職既婚女性」「専業主婦」「未婚男性」「既婚男性」「熟年男性」「熟年女性」「高年男性」「高年女性」に区分して結果を示している。

『Market Insight』では、累積海外旅行経験と過去5年の海外旅行頻度を軸としたセグメンテーションをした上で分析をしている。具体的には、まず、海外旅行経験のない「未経験」、過去5年以内に海外旅行を実施していない「休眠」、過去5年以内に旅行している人に区分している。過去5年以内に出かけている旅行者については、さらに頻度と経験の2軸によって分類をしている。頻度については、平均して毎年1回以上旅行している場合を「高頻度」、それに満たない場合を「低頻度」と位置づけている。経験については、累積10回以上を「高経験」、10回未満については「低経験」と設定している。これらを組み合わせて「高経験・高頻度」「高経験・低頻度」「低経験・高頻度」「低経験・低頻度」として、数値を呈示している。

『エイビーロード海外旅行調査』においては、過去の海外旅行回数を軸とした分析をしている³⁾。この調査では、過去に海外に行った回数が1-3回の人を「ライト」、4-9回の人を「ミドル」、10回以上の人を「ヘビー」として区分している。性年代別に見ていくと、男女ともに加齢とともに「ライト」の比率が低下し、「ヘビー」の比率が上昇していくことが示されている。また、婚姻状況・子どもの有無別では、未婚の男女においては「ライト」の比率が高く、「ヘビー」の比率が高い結果となっている。このほか、ライフステージの区分として、「学生」「社会人独身男性」「社会人女性20・30代」「社会人女性40代以上」「社会人既婚・子どもなし」「社会人子ども1歳以下」「社会人子ども2-6歳」「社会人子ども7歳以上」を採用し、分析をしている。

また、同社が2010年に発表した『海外渡航構造調査2010』を見ていくと、2007-2009年の3年間におけるレジャー目的の海外旅行のアクティブ度を「未経験」「休眠」「ライト」「ヘビー」に区分している。ここで「休眠」とは該当の3年間で海外旅行に行っていないがそれ以前には行ったことがある人、「ライト」とは該当の3年間で毎年ではないが海外旅行に行った人、「ヘビー」とは該当の3年間に毎年海外旅行に行った人を指している。さらに、2004-2006年のアクティブ度からの移動状況についても把握しており、「未経験→未経験」「休眠→休眠」が多く見られる結果が示されている。

1-4 ライフステージと旅行実施に関する先行研究

1-2で見た加齢とともに出国率の数値が変化していくことに影響する要因として、ライフステージが指摘されている。1-3で示した日本の民間調査機関の結果を見てもわかるように、複数の年代にまたがる旅行行動を分析する際には、ライフステージという概念を用いられることが多い。また、中村・西村・高井（2010）では、同じ18-29歳の若者であっても「独身子どもなし」「既婚子どもなし」「既婚子どもあり」のライフステージに分かれており、旅行の実施状況や意識が異なることを示している。

ここで、ライフステージ (life stage) とは、出生から、学校卒業、就職、結婚、出産、子育て、リタイアなど、個人の人生の節目によって変わる生活に着目した区別のことを言う⁴⁾。類似する用語として、ライフサイクル (life cycle) がり、これは人間の生活周期のことを意味する。例えば家族のライフサイクル (family life cycle, FLC) として、結婚、新婚期、育児期、教育期、子どもの独立期、子ども独立後の夫婦期、老後期、夫婦の死亡までを捉えている。さらに、近年の消費者行動研究や人口動態研究ではライフコース (life course) という概念が用いられており、個人が一生の間にたどる人生の道筋 (青木・女性のライフコース研究会, 2008), と説明されている。様々な調査データを見ていくと、ライフステージと就業状況を組み合わせてライフコースのパターンを構成し、分析しているものが多い。

海外の観光行動研究を見ていくと、FLCと旅行行動との関連を分析したものが多くある。なお、日本では、ライフサイクル、ライフステージ、ライフコースは別個の概念で使用されているが、海外の研究ではFLCとして取り扱われているように見受けられる。以下で主要な研究をレビューする。

Lawson (1991) は、ニュージーランドへの国際観光客の消費パターン、休暇活動のタイプとライフステージの関連を調査している。ここでは、FLCを「Young single (25歳以下)」「Young couples (子どもなし)」「Full nest 1 (就学前の子どもあり)」「Full nest 2 (就学中の子どもあり)」「Full nest 3 (依存しない子どもあり)」「Empty nest 1 (本人就労中・子ども独立)」「Empty nest 2 (リタイア)」「Solitary survivor (リタイア独居老人)」の8つに区分し、FLCと旅行中の消費金額や旅行内容との間に関連が見られ、裁量所得 (discretionary income) や子どもによる行動の制約が影響していることを示した。特に裁量所得については、「Young single」「Young couple」では高いが、「Full nest」に入っていくと低下し、「Empty nest 1」で再び上昇してピークに到達し、「Empty nest 2」以降は再度低下していくことを示している。

Bojanic (1992) は、3年以内にヨーロッパを訪れたアメリカの都市部居住者を8つのFLCに分割して分析した。ここでは、伝統的に用いられている6つのFLC (「Bachelor (18-39歳, 独身子どもなし)」「Newly married (18-39歳, 既婚子どもなし)」「Full nest 1 (18-39歳, 既婚子どもあり)」「Full nest 2 (40-49歳, 既婚子どもあり)」「Empty nest (50歳以上, 既婚子どもなし)」「Solitary survivor (50歳以上, 死別, 子ども独立)」)だけではなく、「Middle-aged couples without children (40-49歳, 既婚子どもなし)」「Single parent (18-49歳, 離婚子どもあり)」を新たに加えている。分析の結果、8つのFLCそれぞれが好む旅行に違いがあることが明らかになり、また、海外旅行を多く実施するセグメントとして、裁量所得の多い「Middle-aged couples without children」に加えて、「Single parent」があげられた。

Oppermann (1995) はドイツ人を対象とした調査を行い、FLCを9つに区分した。具体的には、「15-25歳, 親に依存, 親と旅行」「15-25歳, 就労中, 独身またはカップル」「26-40歳, 就労中, 独身またはカップル」「41-62歳, 就労中, 独身またはカップル」「子どもあり, 就労中, 6歳未満の就学前の子どもあり」「40歳未満, 子どもあり, 就労中, 就学中の子どもあり」「41-62歳, 子どもあり, 就労中, 就学中の子どもあり」「子どもあり, 就労中, 子どもが独自に旅行に行ける状況」「63歳以上, リタイア, 独身またはカップル」であった⁵⁾。FLCによって旅行先, 旅行時期, 宿泊施設や交通機関

といった旅行の選択と関連があることを示し、これには、旅行に投じることのできる裁量所得が異なることが影響するとしている。

Hong, Fan, Palmer, and Bhargava (2005) は、FLCを「Married without children (55歳未満, 既婚子どもなし)」「Full nest 1 (40歳未満: 既婚子どもあり)」「Full nest 2 (40歳以上, 既婚子どもあり)」「Empty nest (55歳以上, 既婚子ども独立)」「Single parents (全年代, 未婚子どもあり)」「Solitary survivors (55歳以上, 死別, 子ども独立)」「Others (その他)」「Single (55歳未満, 未婚, 子どもなし)」の8つに区分し、FLCの違いがレジャー・旅行の異なる消費パターンを示すのかについて分析した。その結果、①「Married without children」「Full nest 2」「Empty nest」は未婚者よりも消費する、②「Single parents」や「Solitary survivors」は未婚者よりも消費しない、という点に有意差があることが示された。

このように、多くの研究では旅行行動へのFLCの影響を支持しており、旅行に使用することのできる裁量所得が寄与する要因となっていることを示している。FLCの中でも未婚者、既婚者で子どものない夫婦、子どもが独立した夫婦が旅行を多く行い、消費金額が多くなっていることも共通した結果となっている。

なお、FLCの区分の基準となる変数として回答者の年齢、婚姻状況、子どもの有無、子どもの年齢と独立状況、就労状況が用いられているが、研究によって使用する変数、年齢の区切り方が異なっており、区分が一致していないのが実情である。また、伝統的なカテゴリーを用いて回答者を区分しようとしても、現代では分類不能なサンプルが多く出ることが指摘されており、多様なFLCを考慮する必要性も指摘されている (Lawson, 1991)。

1-5 研究の目的

日本の民間機関の調査を見ていくと、過去の海外旅行経験と最近の実施頻度を軸とした旅行者のセグメンテーションにより分類を行っている。これを見ていくと、海外旅行を「未経験」である人の比率が3~4割を占めているだけでなく、長期間海外旅行から離れて「休眠」している人が4割前後存在していることがわかる。また、国内外の既存の研究・調査を見ていくと、ライフステージ、FLCが人々の旅行行動に影響を与えていることが共通した見解となっており、独立していない子どもを持つライフステージにある場合、旅行行動が抑制されるという傾向が示されている。しかしながら、海外旅行を「休眠」している人、海外旅行に対して“消極的”な人の実態については十分に検討されているとは言えない。

そこで本研究の目的は、第1に、日本人の18-49歳を対象とした海外旅行の実施状況と意識に関する調査結果を用いて、特に“若者”ではない30-49歳の年齢層の人たちの海外旅行の実態を明らかにすることである。第2に、30歳代以上の人を中心に結婚して子どもを持つライフステージに入った人には、「かつては海外旅行をしていたが現在はしていないし、意向も強くない」という、海外旅行の“消極派”であり、「休眠」している人が多いことに着目し、その意識の特徴を解明することである。

2 分析データと回答者の概要

2-1 使用データ

今回の研究では、2013年2月28日から3月5日の6日間にわたり、インターネット・リサーチ会社が保有するパネルを対象に実施した調査データの分析を行う。いわば横断的データの分析をすることになる。

調査回答者は、①全国在住の18歳（高校生を除く）から49歳の日本人男女であり、②海外で1年

以上の連続した期間の居住経験のない人とした。性・年齢別に原則5歳区分でほぼ均等な回答が得られるように割り付けを行った。

主な質問項目は、海外渡航（業務出張を含む）の生涯ならびに過去5年間（2008年以降）の実施回数、今後1年以内の実施意向（7段階評定）、阻害要因（26項目、5段階評定）、関心（10項目、5段階評定）、経験評価（10項目、5段階評定）となっている。属性として、年齢、性別、婚姻状況、子どもの有無、末子年齢、職業、世帯収入を把握した。

最終的に3,182名から回答があった。本稿ではライフステージに着目した分析を行うため、婚姻状況・子どもの有無を基に回答者を「独身子どもなし」「既婚子どもなし」「既婚子どもあり」に区分した⁶⁾。さらに「既婚子どもあり」については末子年齢を踏まえて、「0-2歳」「未就学児」「小学生」「中学生以上」に細分化をした。上記の基準では分類できないサンプルを除外し、最終的に3,069名を有効回答として分析を実施した。

2-2 回答者の年齢とライフステージ

回答者の年齢は18～49歳までにわたるが、現在どのライフステージにあるのかについて見たのが図2である。回答者全体を見ていくと「独身子どもなし」（51.0%）、「既婚子どもなし」（12.2%）、「既婚末子0-2歳」（10.9%）、「既婚末子未就学児」（8.5%）、「既婚末子小学生」（9.3%）、「既婚末子中学生以上」（8.1%）の分布となっている。回答者の年齢が高くなるほど、未婚者の比率が低下し、末子年齢の高いライフステージに属する人の割合が多くなる傾向にある。

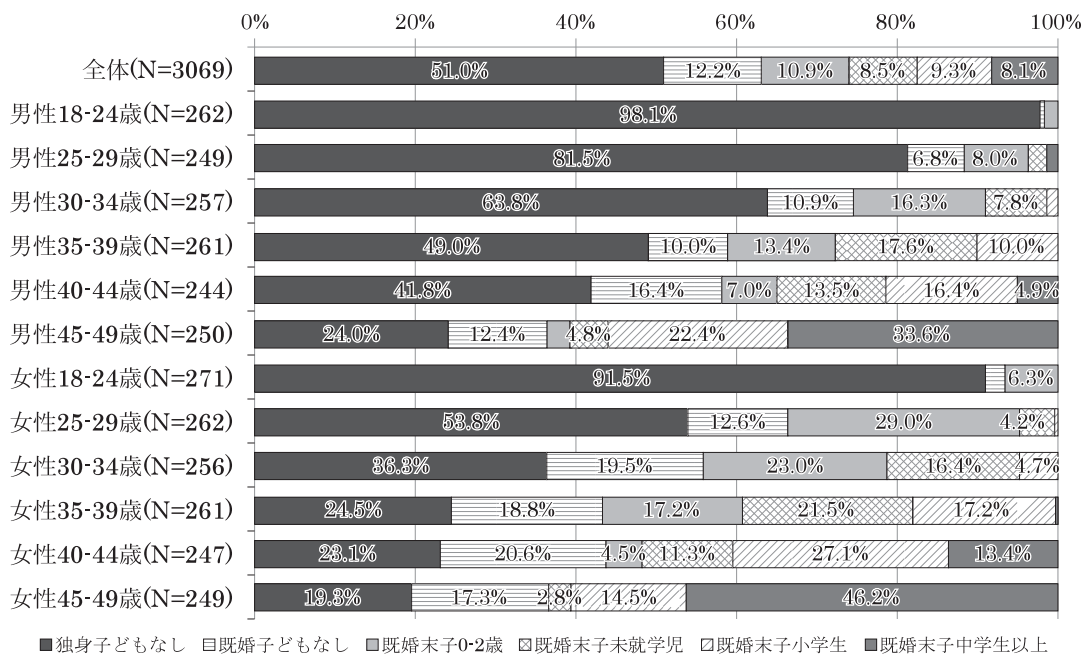


図2 回答者の年齢とライフステージの関係

次に、公益財団法人日本交通公社（2013）の区分（1-3参照、以下JTBF区分と記す）に従って、回答者を分類し、ライフステージとの対応を見ていく（図3）。これによると、全体の分布は「未経験」（38.0%）、「休眠」（29.2%）、「低経験・低頻度」（21.9%）、「高経験・低頻度」（3.9%）、「低経験・高頻度」（1.1%）、「高経験・高頻度」（6.0%）となっている。ライフステージ別に見ていくと、①「独身子どもなし」では「未経験」が5割を上回る、②「既婚子どもなし」では他と比べて「高経験・高頻度」

の比率が高い, ③「低経験・低頻度」の比率は, 「既婚末子0-2歳」までは2~3割程度見られるが, それ以上のライフステージでは2割を下回る, ④「既婚末子未就学児」以上のライフステージとなると「休眠」の比率が4割を上回る, といった特徴が見られる。

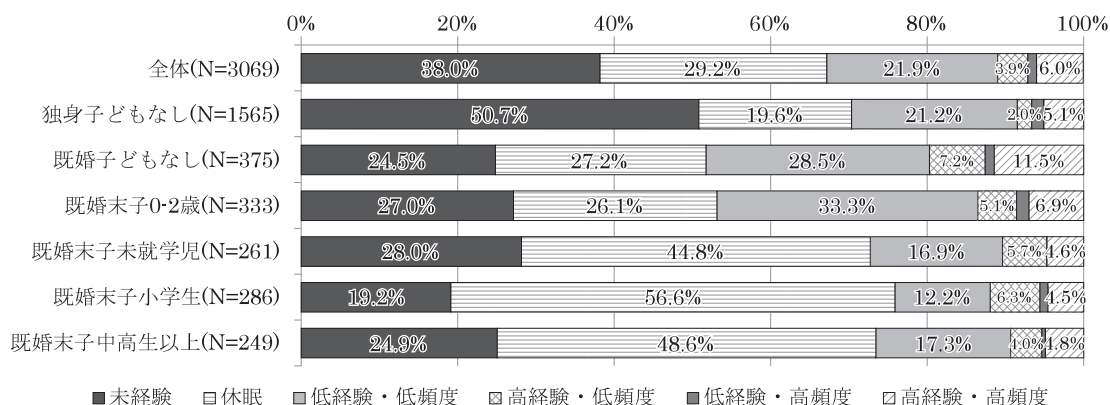


図3 ライフステージとJTBFS区分(経験と頻度)との対応

2-3 渡航回数

これまでの生涯で海外渡航経験が「あり」の人は62.0%, 「なし」の人は38.0%となっており, 未経験者を含めて算出した平均渡航回数は3.65回であった。ライフステージ別に平均値に差があるのかについて一要因の分散分析をしたところ, 有意差があった ($F(5,3063) = 14.988, p < 0.001$)。具体的に見ていくと(図4), 「独身子どもなし」が2.58回と最も少なく, 「既婚子どもなし」が5.30回と最も多い。「既婚子どもあり」では, 末子年齢によりばらつきがある。末子年齢が小学生まではライフステージが進むほど生涯の渡航回数が多くなるが, 中学生以上で少なくなっている。これは, 海外旅行が盛んであったとは言えない時期に回答者が若者時代を過ごしたことが影響しており, 世代による影響が出ていると考えられる。

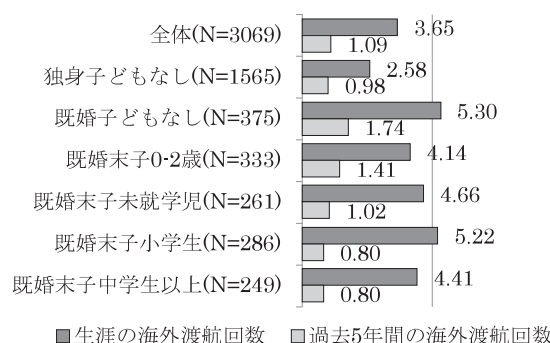


図4 平均渡航回数(ライフステージ別)

2008年以降の過去5年間の渡航回数を見ていくと, 平均は1.09回であり(未実施者を含む), 回答者の67.2%がこの5年間に一度も海外渡航をしていない。一要因の分散分析を行ったところ, こちらも有意差が認められ ($F(5,3063) = 6.190, p < 0.001$), ライフステージにより平均値に差があると考えられる。詳細を見ていくと, 「既婚子どもなし」(1.74回), 「既婚末子0-2歳」(1.41回)が多い一方, 末子年齢が小学生以上の段階では, 過去5年間の平均渡航回数が1回を下回っている。

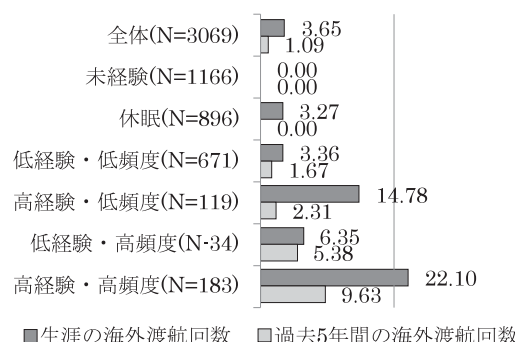


図5 平均渡航回数(JTBFS区分別)

なお, JTBFS区分ごとに回答者の渡航回数を見たのが図5である。区分による生涯の海外渡航回

数の平均値 (F(4,1898) = 428.739, p < 0.001), 過去5年間の海外渡航回数の平均値 (F(3,1003) = 340.559, p < 0.001) については, 一要因の分散分析をした結果, 有意差が認められた⁷⁾。数値を具体的に見ていくと, ①「休眠」の人であっても過去に平均3.27回の渡航をしていること, ②「高経験・低頻度」では生涯の渡航回数が平均14.78回, 「高経験・高頻度」では22.10回となっていること, ③「低経験・高頻度」の最近5年間の渡航回数が5.38回とほぼ年1回の実施ペースであるのに対して, 「高経験・高頻度」では9.63回と年に複数回の実施ペースであること, が読み取れる。

2-4 渡航経験と実施意向による区分

生涯における海外渡航経験の有無と今後1年以内の海外旅行実施意向を基に, 回答者を“参加者”“希望派”“消極派”“否定派”への4区分(中村・西村・高井, 2014)を行った(表2)。全体では「今後1年以内の海外旅行の実施意向の弱い人」である“消極派”が43.0%となっている。次いで“否定派”が33.7%を占めており, “参加者”(18.9%), “希望派”(4.4%)を大きく上回っている。

表2 海外渡航経験と実施意向による区分

区分	人数	構成比	生涯渡航経験	今後1年以内実施意向
全体	3,069	100.0%	—	—
参加者	580	18.9%	あり	絶対に行きたい / 行きたい
希望派	135	4.4%	なし	
消極派	1,320	43.0%	あり / なし	どちらかと言えば行きたい / どちらでもない
否定派	1,034	33.7%	あり / なし	どちらかと言えば行きたくない / 行きたくない / 絶対に行きたくない

では, “消極派”はどのライフステージで見られるのだろうか。図6は, ライフステージ別に経験と意向による区分の分布を見たものである。ここでは, 生涯ならびに過去5年の渡航経験の有無を踏まえて, “参加者”“消極派”“否定派”の細分化を行い, 2008年以降に渡航経験のある人を「アクティブ」, 2008年以降に渡航がない人を「休眠」としている。図6を見ていくと, 確かに「既婚・子どもなし」では“参加者・アクティブ”の比率が他よりも高く, 旅行を行いやすいライフステージであることがわかる。一方で, どのライフステージにおいても“消極派”は4割以上を占めている。中でも, 末子年齢が「未就学児」「小学生」のライフステージの場合, “消極派”の割合は5割に近い値となっている。

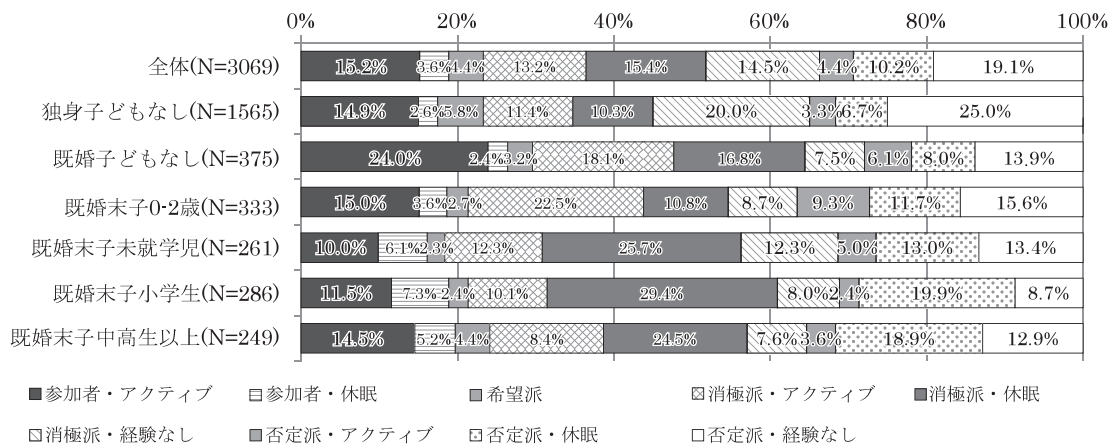


図6 海外渡航経験と実施意向による区分 (ライフステージ別)

また、末子が「未就学児」「小学生」「中学生」の場合、過去5年間（2008年以降）に海外渡航をしていない“消極派・休眠”の比率は25%を上回っている。このことから、結婚し子どもを持つライフステージの段階に入っている人では、「かつて海外旅行をしたことはあるけれども、最近はしていないし、今は積極的に行きたいとは思わない」という人が多く存在すると解釈できる。なお、「既婚末子0-2歳」のライフステージでは、“消極派・アクティブ”が22.5%と他のライフステージよりも比率が高くなっているが、これは、子どもをもうける前の時期に海外渡航をしていたことが影響していると考えられる。

次に、経験・意向による区分別に過去の海外渡航回数を見ていく（図7）。一要因の分散分析を行ったところ、生涯の渡航回数（ $F(5,1897) =$

$55.471, p < 0.001$ ）、過去5年間の渡航回数（ $F(2,1004) = 42838.884, p < 0.001$ ）とも区分による平均値に有意差が見られた。生涯の渡航回数を見ると、“参加者・アクティブ”が10.92回と最も多い。次いで“否定派・アクティブ”（6.33回），“消極派・アクティブ”（5.72回），“参加者・休眠”（4.63回），“消極派・休眠”（3.10回），“否定派・休眠”（3.04回）となっている。このことから、過去5年以内に海外渡航している人の平均渡航回数が多くなっていること，“消極派”“否定派”よりも“参加者”の平均渡航回数が多いことがわかる。

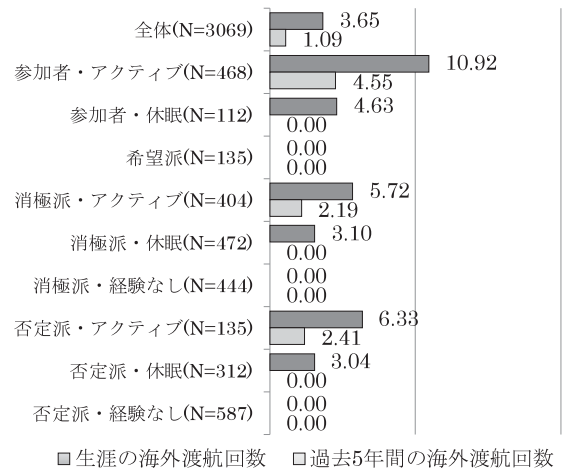


図7 平均渡航回数（海外渡航経験と実施意向による区分別）

さらに、JTBF区分（1-4参照）との対応を図8に示す。これによると、「未経験」では“消極派・

経験なし”（38.1%），“否定派・経験なし”（50.3%）があわせて9割弱を占めている。「休眠」を見ても“消極派・休眠”が52.7%と半数を占めている。未経験者や休眠の人の多くは、海外旅行に対する現在の実施意向が弱い、またはないという状況にあることがわかる。一方、過去5年以内に旅行をしている区分を見ていくと、「低経験・低頻度」では“消極派・アクティブ”が48.7%を占める一方、「高経験・高頻度」では“参加者・アクティブ”が78.1%となっている。経験や実施頻度が高い区分では“参加者・アクティブ”，低い区分では“消極派・アクティブ”の比率が高くなることが読み取れる。

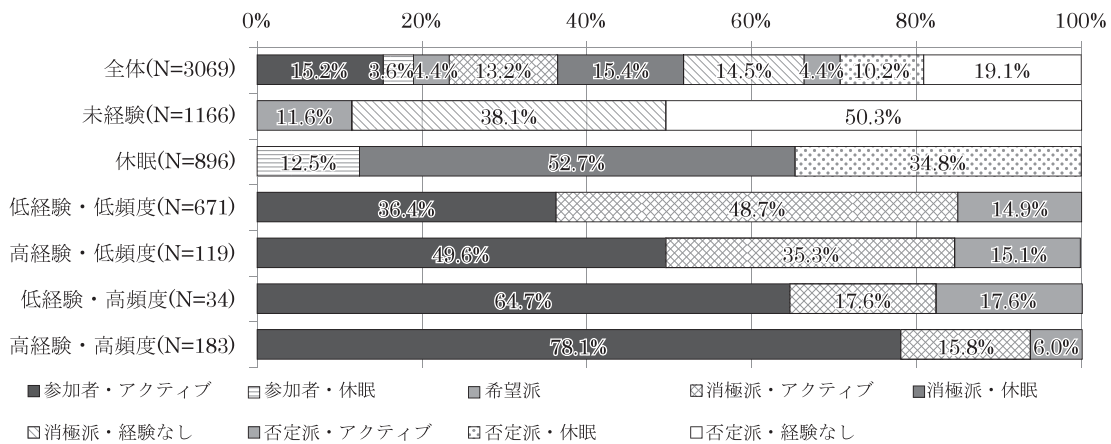


図8 海外渡航経験と実施意向による区分2（JTBF区分との対応）

3 海外旅行“消極派”の特徴

前章では、日本人の18-49歳を見ていくと、どの年齢層にも現状では海外旅行への実施意向の弱い“消極派”が一定比率で存在していることを確認した。同時に、特に30歳以降では既婚者で子どもがいるライフステージの人が多く、海外旅行に対して“消極派”である人の比率が高く、しかも最近5年間は海外旅行をしていない「休眠」中の人が多くを占めることを確認した。このことから、“消極派”はライフステージによって異質なものとなっている可能性がある。そこで、本章では“消極派”の人はどのような意識を持っているのかについて、経験評価、関心、阻害要因の評価結果を用いてライフステージによる違いを検討していく。

3-1 経験評価

まず、海外渡航経験者が、過去の海外旅行の経験を評価した結果（10項目、5段階評価）を見ていく⁸⁾。“消極派・アクティブ”“消極派・休眠”をあわせて“消極派・経験あり”として、ライフステージごとの評定平均を示したのが表3である。一要因の分散分析による平均値の検定を行ったところ、1項目は0.1%水準、8項目は1%水準、1項目は5%水準で有意となった。

全体的に経験評価の数値が低いライフステージは「独身子どもなし」であり、10項目中7項目でも低い数値を示した。一方、数値が高いのは「既婚末子0-2歳」となっている。「既婚末子未就学児」「既婚末子小学生」「既婚末子中学生」さらには「既婚子どもなし」においても、一部の例外はあるが、一般的に「独身子どもなし」よりも高い評定値となっている。このことから、①「独身子どもなし」

表3 “消極派・経験あり（アクティブ+休眠）”の海外旅行経験評価（ライフステージ別）

	全体 (N=876)	独身 子ども なし (N=340)	既婚 子ども なし (N=131)	既婚 末子 0-2歳 (N=111)	既婚 末子 未就学児 (N=99)	既婚 末子 小学生 (N=113)	既婚 末子 中学生 以上 (N=82)	F値
海外旅行に行ってよかった	4.24	4.13	4.26	4.48	4.30	4.31	4.20	4.132 **
また海外旅行に行ってみたいと思う	4.22	4.12	4.23	4.49	4.23	4.22	4.29	4.261 **
海外旅行の思い出は私にとって大切だ	4.04	3.90	4.11	4.29	4.09	4.10	4.01	4.748 ***
海外旅行で得られる経験は私にとって大切だ	3.87	3.77	3.94	4.09	3.89	3.86	3.83	2.993 *
これまでの海外旅行に満足している	3.81	3.69	3.93	4.05	3.76	3.81	3.87	3.661 **
海外旅行が好きだ	3.66	3.55	3.74	3.92	3.62	3.60	3.72	3.531 **
他の人にも海外旅行をすすめたと思う	3.56	3.53	3.63	3.80	3.37	3.50	3.57	3.064 **
これまでの海外旅行では望みどおりのことができた	3.47	3.34	3.62	3.70	3.40	3.50	3.54	4.355 **
海外旅行のない人生は考えられない	2.75	2.76	2.80	3.01	2.54	2.62	2.67	3.069 **
海外旅行は私の生きがいだ	2.57	2.59	2.59	2.85	2.39	2.45	2.43	3.504 **

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

ではこれまでの海外旅行に対する経験評価が低く、逆に既婚者では評価が高い、②既婚者の中でも、海外旅行を直近までしていた人が多いと推察される「既婚末子0-2歳」のライフステージにある人が、過去の経験を高く評価している、③「既婚末子未就学児」以上のライフステージでは、「既婚末子0-2歳」よりも評価の値は低いが「独身子どもなし」よりは高い値を示しており、過去の海外旅行の経験に対して必ずしもネガティブな印象を持っているわけではない、といったことがわかる。

3-2 関心

回答者全員に現在の海外旅行への関心について10項目の評定（5段階）を求めた。表4は、“消極派・アクティブ”“消極派・休眠”“消極派・経験なし”のそれぞれにおける評定平均値に差があるのかについて、一要因の分散分析を行った結果である。これによると、10項目中9項目で有意差（うち8項目が0.1%水準、1項目が1%水準）が見られ、全体的に“消極派・アクティブ”、“消極派・休眠”、“消極派・経験なし”の順で評定平均値が高くなっていることがわかる。特に、“消極派・経験なし”では、10項目中7項目では全体の評定平均値が3を下回っており、海外旅行に対する興味が弱いこともうかがえる。つまり、同じ“消極派”であっても、海外旅行の実施経験の有無ならびに最近の実施状況によって、海外旅行への関心度が異なると考えられる。

次にライフステージ別の差異があるのかについて見ていく。表5は“消極派・経験あり（アクティブ+休眠）”の人について、ライフステージ別の評定平均を見たものである。8項目が逆転項目となっているが、作表にあたりポジティブな評価ほど数値が高くなるように調整を行っている⁹⁾。これによ

表4 “消極派”の海外旅行への関心（JTBF区分別）

	全体 (N = 1320)	消極派・ アクティブ (N = 404)	消極派・ 休眠 (N = 472)	消極派・ 経験なし (N = 444)	F 値
海外旅行はいいものだと思う	3.86	4.01	3.92	3.65	27.919 ***
海外旅行は行く価値のあるものだと思う	3.85	3.95	3.87	3.75	7.685 ***
[逆転] 海外旅行へ行っただとしても将来の視野が広がるわけではない	3.31	3.32	3.34	3.26	0.955
[逆転] なんとなく海外旅行に行く気分にならない	3.20	3.40	3.24	2.98	25.016 ***
[逆転] 海外旅行に行くためにまとまった時間を確保しようと思えない	3.10	3.25	3.08	2.99	10.163 ***
[逆転] 海外旅行をするよりも、自宅やその周辺にいたい	3.06	3.13	3.14	2.90	11.726 ***
[逆転] 海外旅行に行くために、まとまったお金を用意しようと思えない	3.03	3.21	3.04	2.86	16.817 ***
[逆転] もし1週間時間を自由に使えるなら、その時間を海外旅行以外に使いたい	2.78	2.83	2.86	2.66	7.005 **
[逆転] 旅行をするなら海外よりも日本国内がいい	2.65	2.76	2.72	2.48	17.531 ***
[逆転] もし30万円を自由に使えるなら、海外旅行以外にお金を使いたい	2.58	2.72	2.59	2.45	8.576 ***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

表5 “消極派・経験あり（アクティブ+休眠）”の海外旅行への関心（ライフステージ別）

	全体 (N=876)	独身 子ども なし (N=340)	既婚 子ども なし (N=131)	既婚 末子 0-2歳 (N=111)	既婚 末子 未就学児 (N=99)	既婚 末子 小学生 (N=113)	既婚 末子 中学生 以上 (N=82)	F値
海外旅行はいいものだと思う	3.97	3.86	3.96	4.23	4.03	3.93	4.01	5.043 ***
海外旅行は行く価値のあるもの だと思う	3.90	3.80	3.95	4.14	3.96	3.90	3.88	4.454 **
[逆転] 海外旅行へ行ったとしても 将来の視野が広がるわけではない	3.33	3.24	3.31	3.41	3.34	3.41	3.52	2.066
[逆転] なんとなく海外旅行に行く 気分になれない	3.31	3.21	3.34	3.53	3.33	3.26	3.41	2.827 *
[逆転] 海外旅行に行くためにま とまった時間を確保しようと思 えない	3.16	3.08	3.18	3.41	3.16	3.09	3.21	3.271 **
[逆転] 海外旅行をするよりも、 自宅やその周辺にいたい	3.14	2.98	3.21	3.24	3.25	3.25	3.24	4.397 **
[逆転] 海外旅行に行くために、 まとまったお金を用意しようと思 えない	3.12	3.03	3.24	3.19	3.15	3.13	3.17	1.624
[逆転] もし1週間時間を自由に 使えるなら、その時間を海外旅 行以外に使いたい	2.85	2.72	2.98	2.96	2.78	2.90	2.99	3.417 **
[逆転] 旅行をするなら海外より も日本国内がいい	2.74	2.60	2.79	2.86	2.85	2.82	2.83	4.051 **
[逆転] もし30万円を自由に使え るなら、海外旅行以外にお金を 使いたい	2.65	2.59	2.63	2.81	2.66	2.60	2.78	1.521

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

ると、10項目のうち7項目で有意差（うち1項目が0.1%水準、5項目が1%水準、1項目が5%水準）が見られた。経験評価と同様に、「独身子どもなし」よりも既婚者のライフステージに入っている人のほうが海外旅行への関心に関する各項目の評定平均は高くなっており、海外旅行に対する関心が低くはないことがわかる。とりわけ「既婚末子0-2歳」のライフステージでは数値が高い。ただし、「もし1週間時間を自由に使えるなら、その時間を海外旅行以外のことに使いたい」「旅行をするなら海外よりも日本国内がいい」「もし30万円を自由に使えるなら、海外旅行以外のことにお金を使いたい」の3つの逆転項目については、数値変換後の評定平均がどのライフステージにおいても3を下回っており、海外旅行実施に対する優先度が低い状態にあることがうかがえる。

表6は“消極派・経験なし”の人の海外旅行への関心の評定結果を、ライフステージ別に見たものである。“消極派・経験あり”とは異なり有意差（5%水準）があるのは1項目に限られる。つまり、海外渡航未経験の“消極派”では、全体的にライフステージによって海外旅行への関心の評定に差異があるとは言えないことがわかる。

表6 “消極派・経験なし”の海外旅行への関心（ライフステージ別）

	全体 (N=444)	独身 子ども なし (N=340)	既婚 子ども なし (N=131)	既婚 末子 0-2歳 (N=111)	既婚 末子 未就学児 (N=99)	既婚 末子 小学生 (N=113)	既婚 末子 中学生 以上 (N=82)	F値
海外旅行はいいものだと思う	3.65	3.66	3.36	4.03	3.75	3.43	3.42	2.925 *
海外旅行は行く価値のあるもの だと思う	3.75	3.76	3.39	3.97	3.88	3.65	3.68	1.899
[逆転] 海外旅行へ行ったとしても 将来の視野が広がるわけではない	3.26	3.26	3.11	3.41	3.47	3.04	3.26	0.962
[逆転] なんとなく海外旅行に行く 気分になれない	2.98	2.94	2.82	3.31	3.13	3.04	2.89	1.188
[逆転] 海外旅行に行くためにま とまった時間を確保しようと思 えない	2.99	2.99	2.93	3.07	3.06	2.87	3.00	0.187
[逆転] 海外旅行をするよりも、 自宅やその周辺にいたい	2.90	2.87	2.86	3.14	2.94	2.96	3.05	0.681
[逆転] 海外旅行に行くために、 まとまったお金を用意しようと思 えない	2.86	2.82	2.75	3.10	3.03	2.74	3.21	1.427
[逆転] もし1週間時間を自由に 使えるなら、その時間を海外旅 行以外に使いたい	2.66	2.64	2.86	2.69	2.59	2.48	3.05	1.206
[逆転] 旅行をするなら海外より も日本国内がいい	2.48	2.46	2.57	2.52	2.38	2.57	2.53	0.258
[逆転] もし30万円を自由に使え るなら、海外旅行以外にお金を 使いたい	2.45	2.45	2.39	2.38	2.56	2.52	2.32	0.212

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

3-3 阻害要因

海外旅行の阻害要因について、中村・西村・高井（2010）で使用した34項目のうち26項目を用いて5段階での評定を全回答者に求めた。阻害要因の分析にあたっては、Crawford and Godbey（1987）による個人内阻害要因（intrapersonal constraints）、対人的阻害要因（interpersonal constraints）、構造的阻害要因（structural constraints）の3類型が多くの研究で用いられていることを踏まえ¹⁰⁾、表7～9には今回の調査結果と阻害要因の3類型との対応を中村（2014a）の結果に基づいて示している。

表7は、“消極派”全体について、「アクティブ」「休眠」「経験なし」のそれぞれについて阻害要因の評定平均値とその差の検定結果を見たものであり、26項目中25項目で有意差（19項目が0.1%水準、3項目が1%水準、3項目が5%水準）が認められた。全体的に、“消極派・経験なし”“消極派・休眠”“消極派・アクティブ”の順で阻害要因の知覚の程度が高くなっている。

“消極派・経験あり（アクティブ+休眠）”の人について、ライフステージ別の評定平均を表8に示す。一要因の分散分析を行った結果、26項目中13項目で有意差（4項目が0.1%水準、2項目が1%水準、7項目が5%水準）が見られ、同じ“消極派・経験あり”でもライフステージによる阻害要因の知覚の差異がある程度認められる。全体的に、「構造的阻害要因」「対人的阻害要因」、ならびに「個人内

表7 “消極派”の海外旅行への阻害要因（JTBF区分別）

		全体 (N = 1320)	消極派・ アクティブ (N = 404)	消極派・ 休眠 (N = 472)	消極派・ 経験なし (N = 444)	F 値
構造的阻害 要因(金銭)	金銭面での余裕がない	3.76	3.45	3.94	3.85	31.447 ***
	海外旅行の費用は高すぎる	3.76	3.60	3.87	3.80	11.669 ***
構造的 阻害要因 (時間)	普段の生活では、休みを取りにくい	3.49	3.46	3.60	3.41	3.881 *
	海外旅行に行くだけのまとまった時間を取りにくい	3.58	3.52	3.71	3.50	6.309 **
	同行者とのスケジュールを合わせることが難しい	3.28	3.21	3.35	3.27	2.722
個人内 阻害要因 (言語不安)	外国語を話すのに不安がある	3.64	3.47	3.66	3.77	10.453 ***
	日本語が通じないのが不安である	3.53	3.35	3.47	3.75	20.501 ***
	外国人とのコミュニケーションに不安がある	3.53	3.38	3.49	3.72	15.374 ***
個人内 阻害要因 (滞在不安)	日本とは文化が異なるので不安である	3.14	2.99	3.04	3.38	23.259 ***
	旅先でトラブルが起きた場合に不安である	3.78	3.64	3.81	3.88	8.114 ***
	海外の食べ物に不安がある	3.25	3.10	3.18	3.46	16.062 ***
	海外では衛生面に不安がある	3.64	3.54	3.65	3.73	5.032 **
	海外での治安が不安である	3.82	3.70	3.86	3.88	5.771 **
	海外での伝染病が不安である	3.44	3.30	3.45	3.55	7.823 ***
個人内 阻害要因 (計画負担)	旅行の計画を立てるのが面倒である	2.97	2.89	2.82	3.19	17.148 ***
	旅行の準備・手続きをすることが面倒である	3.23	3.05	3.17	3.46	19.15 ***
	海外旅行の情報を収集することが面倒である	2.92	2.81	2.81	3.14	18.464 ***
	海外旅行に行くのに、どうしたらよいかわからない	2.92	2.65	2.74	3.38	73.324 ***
	海外のどこに行ったら良いかわからない	2.83	2.69	2.71	3.10	24.05 ***
	自分から誰かを海外旅行に誘おうと思わない	3.25	3.08	3.23	3.43	14.748 ***
	自宅から国際線の発着する空港までの移動が不便である	3.21	3.08	3.27	3.27	4.604 *
対人的 阻害要因	一緒に海外旅行に行く人がいない	3.05	2.86	2.98	3.30	20.951 ***
	誰も海外旅行に誘ってくれない	3.16	2.95	3.21	3.29	14.069 ***
構造的 阻害要因 (自分)	自分の健康上の理由で海外に行くことができない	2.25	2.18	2.12	2.44	11.409 ***
	家族やペットのため長期間自宅を離れるのが困難である	2.84	2.69	3.00	2.81	7.303 *
	飛行機に搭乗するのが怖い	2.47	2.28	2.43	2.68	14.891 ***

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

阻害要因」のうちの計画負担に関する項目においてライフステージによる差異が見られた。一方、「個人内阻害要因」のうち、言語不安、滞在不安に関わる項目では、ライフステージによる有意差がほとんど見られない結果となった。

詳細に見ていくと、ライフステージの中でも、「既婚子どもなし」は、同じ“消極派”であっても、阻害要因の知覚の程度が低くなっており、とりわけ、金銭不足や時間不足、自身の生活状況といった「構造的阻害要因」、同行者がいないといった「対人的阻害要因」が低い状況にある。一方、「独身子ども

表8 “消極派・経験あり（アクティブ+休眠）”の海外旅行への阻害要因（ライフステージ別）

		全体 (N=876)	独身 子ども なし (N=340)	既婚 子ども なし (N=131)	既婚 末子 0-2歳 (N=111)	既婚 末子 未就学 児 (N=99)	既婚 末子 小学生 (N=113)	既婚 末子 中学生 以上 (N=82)	F 値
構造的 阻害要因 (金銭)	金銭面での余裕がない	3.71	3.64	3.45	3.74	4.01	3.87	3.85	5.058 ***
	海外旅行の費用は高すぎる	3.75	3.71	3.63	3.62	4.01	3.88	3.74	3.550 **
構造的 阻害要因 (時間)	普段の生活では、休みを取りにくい	3.54	3.52	3.30	3.51	3.67	3.69	3.63	2.237 *
	海外旅行に行くだけのまとまった時間を取りにくい	3.62	3.59	3.34	3.54	3.78	3.87	3.78	4.615 ***
	同行者とのスケジュールを合わせることが難しい	3.29	3.31	3.05	3.30	3.41	3.39	3.26	2.586 *
個人内 阻害要因 (言語不安)	外国語を話すのに不安がある	3.57	3.59	3.47	3.60	3.63	3.57	3.54	0.415
	日本語が通じないのが不安である	3.42	3.49	3.33	3.46	3.46	3.33	3.26	1.425
	外国人とのコミュニケーションに不安がある	3.44	3.48	3.31	3.50	3.47	3.37	3.43	0.864
個人内 阻害要因 (滞在不安)	日本とは文化が異なるので不安である	3.02	3.13	2.92	3.05	2.82	2.92	3.04	2.403 *
	旅先でトラブルが起きた場合に不安である	3.73	3.78	3.69	3.71	3.79	3.63	3.68	0.690
	海外の食べ物に不安がある	3.14	3.26	3.10	2.98	3.06	2.96	3.28	2.941 *
	海外では衛生面に不安がある	3.60	3.66	3.55	3.50	3.58	3.57	3.61	0.733
	海外での治安が不安である	3.78	3.79	3.72	3.78	3.84	3.82	3.73	0.334
	海外での伝染病が不安である	3.38	3.44	3.25	3.40	3.28	3.32	3.49	1.262
個人内 阻害要因 (計画負担)	旅行の計画を立てるのが面倒である	2.85	2.99	2.70	2.69	2.86	2.81	2.79	2.606 *
	旅行の準備・手続きをすることが面倒である	3.12	3.18	3.05	3.00	3.15	3.06	3.20	0.822
	海外旅行の情報を収集することが面倒である	2.81	2.94	2.69	2.67	2.79	2.77	2.72	2.427 *
	海外旅行に行くのに、どうしたらよいかわからない	2.69	2.84	2.44	2.67	2.54	2.70	2.70	3.818 **
	海外のどこに行ったら良いかわからない	2.70	2.83	2.48	2.75	2.65	2.58	2.63	2.984 *
	自分から誰かを海外旅行に誘おうと思わない	3.16	3.20	3.08	2.99	3.24	3.18	3.20	1.202
	自宅から国際線の発着する空港までの移動が不便である	3.18	3.19	3.14	3.14	3.13	3.30	3.18	0.409
対人的 阻害要因	一緒に海外旅行に行く人がいない	2.93	3.17	2.75	2.79	2.72	2.73	2.89	6.955 ***
	誰も海外旅行に誘ってくれない	3.09	3.11	2.91	3.10	3.27	3.01	3.20	2.022
構造的 阻害要因 (自分)	自分の健康上の理由で海外に行くことができない	2.15	2.22	2.11	2.04	2.06	2.11	2.20	0.840
	家族やペットのため長期間自宅を離れるのが困難である	2.86	2.51	2.94	3.09	3.13	3.18	3.10	9.663 ***
	飛行機に搭乗するのが怖い	2.36	2.35	2.33	2.33	2.35	2.44	2.41	0.210

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

表9 “消極派・経験なし”の阻害要因の知覚（ライフステージ別）

		全体 (N=444)	独身 子ども なし (N=313)	既婚 子ども なし (N=28)	既婚 末子 0-2歳 (N=29)	既婚 末子 未就学 児 (N=32)	既婚 末子 小学生 (N=23)	既婚 末子 中学生 以上 (N=19)	F 値
構造的 阻害要因 (金銭)	金銭面での余裕がない	3.85	3.87	3.50	4.10	3.78	3.70	3.89	1.258
	海外旅行の費用は高すぎる	3.80	3.80	3.39	3.93	3.88	3.87	3.95	1.509
構造的 阻害要因 (時間)	普段の生活では、休みを取りにくい	3.41	3.39	2.82	3.45	3.81	3.78	3.58	3.458 **
	海外旅行に行くだけのまとまった時間を取りにくい	3.50	3.47	2.89	3.62	4.03	3.74	3.58	4.621 ***
	同行者とのスケジュールを合わせることが難しい	3.27	3.28	2.89	3.21	3.50	3.43	3.21	1.690
個人内 阻害要因 (言語不安)	外国語を話すのに不安がある	3.77	3.78	3.36	4.00	3.78	3.87	3.58	1.676
	日本語が通じないのが不安である	3.75	3.80	3.43	3.76	3.88	3.83	3.21	2.381 *
	外国人とのコミュニケーションに不安がある	3.72	3.78	3.29	3.66	3.75	3.78	3.32	2.389 *
個人内 阻害要因 (滞在不安)	日本とは文化が異なるので不安である	3.38	3.42	3.18	3.31	3.53	3.22	3.16	1.002
	旅先でトラブルが起きた場合に不安である	3.88	3.93	3.46	3.97	3.88	3.87	3.63	1.927
	海外の食べ物に不安がある	3.46	3.47	3.14	3.62	3.59	3.57	3.21	1.166
	海外では衛生面に不安がある	3.73	3.73	3.50	3.72	3.94	3.70	3.68	0.813
	海外での治安が不安である	3.88	3.92	3.43	3.79	4.03	3.87	3.84	2.053
	海外での伝染病が不安である	3.55	3.53	3.29	3.72	3.91	3.65	3.37	1.929
個人内 阻害要因 (計画負担)	旅行の計画を立てるのが面倒である	3.19	3.20	2.93	3.00	3.44	3.30	3.11	1.189
	旅行の準備・手続きをすることが面倒である	3.46	3.48	3.32	3.45	3.44	3.57	3.21	0.524
	海外旅行の情報を収集することが面倒である	3.14	3.18	2.75	3.00	3.25	3.22	2.95	1.624
	海外旅行に行くのに、どうしたらよいかわからない	3.38	3.43	3.14	3.38	3.47	3.30	2.79	2.140
	海外のどこに行ったら良いかわからない	3.10	3.07	3.00	3.34	3.13	3.26	3.05	0.618
	自分から誰かを海外旅行に誘おうと思わない	3.43	3.42	3.18	3.38	3.56	3.70	3.47	0.902
	自宅から国際線の発着する空港までの移動が不便である	3.27	3.29	3.21	2.97	3.47	3.22	3.26	0.878
対人的 阻害要因	一緒に海外旅行に行く人がいない	3.30	3.40	3.04	3.14	2.91	3.17	3.05	2.445 *
	誰も海外旅行に誘ってくれない	3.29	3.27	3.07	3.45	3.41	3.52	3.26	0.783
構造的 阻害要因 (自分)	自分の健康上の理由で海外に行くことができない	2.44	2.48	2.21	2.34	2.34	2.48	2.47	0.393
	家族やペットのため長期間自宅を離れるのが困難である	2.81	2.69	2.89	3.14	3.28	3.30	2.63	3.302 **
	飛行機に搭乗するのが怖い	2.68	2.68	2.71	2.66	2.66	3.04	2.42	0.746

なし」では、他のライフステージよりも「対人的阻害要因」が高くなっており、同行者がいないことが海外旅行の実施を妨げになっている可能性がある。既婚者で子どもがいるライフステージに入ってくると、末子年齢にもよるが、「構造的阻害要因（自分）」の中でも、家庭の状況が阻害要因として浮上してくる。また、金銭的な負担を感じたり、特に末子が就学後のライフステージの家族では日程調整に負担を感じたりするようになる。さらに、家族旅行のための情報収集に苦慮している可能性もある。

表9は、「消極派・経験なし」の人の阻害要因の知覚を見たものである。一要因の分散分析の結果、5%水準以上で有意差があったのは26項目中6項目であり、全体的にライフステージによる阻害要因の知覚の程度に差異があるとは言えない。有意差の見られた項目を見ていくと、「既婚子どもあり」のライフステージに入っている場合は、家庭の状況や時間の確保を阻害要因として相対的に強く知覚している一方で、「独身子どもなし」では他のライフステージと比べて同行者の確保を大きな阻害要因としていることがわかる。

4 結論

本稿では、観光行動の一般的意思決定に関するモデルを構築する準備作業として、18-49歳までを対象とした海外旅行への意識と実態に関する調査データを分析した。分析にあたっては、婚姻状況と子どもの有無、末子年齢などのライフステージを考慮した。加えて、海外旅行の経験と意向による区分（「参加者」「希望派」「消極派」「否定派」）、海外旅行の実施経験と最近の実施頻度による区分（アクティブ、休眠、経験なし）を組み入れて、回答者の分類を行った。

本研究の第1の目的は、日本人の18-49歳の海外旅行の実態、特に「若者」ではない30-49歳の年齢層の人たちの特徴を把握することであった。30-49歳の年代は、既婚・子どもありのライフステージにある人が多く、特に44歳以下の人の場合、末子年齢が小学生以下の人を中心であった。その実態を見ていくと、①経験と頻度の区分では、「未経験」「休眠」の層が多い、②経験と意向による区分では現在の海外旅行の実施意向が強い「消極派」の比率が高い、③既婚者で末子が未就学児以降の年齢の人では「消極派」の中でも過去5年間で海外旅行をしていない「休眠」者の比率が高くなる、ということが明らかになった。30歳以降を中心とする既婚者で子どもがいるライフステージの人は、若者時代、独身時代、子どもを持つ前のライフステージでは海外旅行を経験したが、子どもをもうけたあとでは海外旅行から離れる人が多いのが実態となっている。

第2の目的は、30歳代以上の人を中心に結婚して子どもを持つライフステージに入った人に多く見られる、海外旅行の「消極派」の意識の特徴を解明することであった。海外旅行の経験評価、関心、阻害要因について分析した結果、同じ「消極派」の海外旅行の経験者であっても、ライフステージによって意識面での特徴が異なることが判明した。既婚者で子どもがいるライフステージにおいて、海外渡航経験のある「消極派」は、過去の海外旅行に良い思い出もあり、現在もそれなりの興味はあるが、金銭面や同行者との時間調整、家庭の状況などの「構造的阻害要因」、「個人内阻害要因」のうちの計画負担に関する知覚の程度が大きく、海外旅行に積極的に行こうとはしないグループと位置づけられる。「独身子どもなし」のライフステージにある人は、「既婚子どもあり」の人ほどは海外旅行に対してポジティブな評価をしておらず、同行者の確保といった「対人的阻害要因」を知覚している結果となった。

一方、海外渡航の経験のない「消極派」については、渡航経験のある「消極派」と比べて、海外旅行への関心は全体的に低く、阻害要因に関しては知覚の程度が全体的に高い。ライフステージによる違いを見ていくと、関心、阻害要因の程度とも一部の項目を除いて差異が見られないことが示された。

このように見ていくと、海外旅行の実施状況にライフステージによる影響があること、特に海外旅行を実施していないライフステージとして、既婚者で子どもが独立していないライフステージを指摘できることについては、第1章で示した海外の先行研究と同様の結果が示されたと見ることができる。一方、“消極派”の意識については、渡航経験者については全体的にライフステージによる違いが認められるものの、渡航未経験者についてはライフステージによる影響がほとんど見られないことを、新たな知見として加えることができよう。

本研究は、実務上にはどのような示唆があるのだろうか。2012年3月に改訂された観光庁の「観光立国推進基本計画」によると、日本人の年間海外旅行者数を2016年までに2000万人までに拡大することを目指している。計画策定時の現状よりも年間300万人以上の旅行者を増やすことが求められる。これを実現するには、①既存の「アクティブ」層，“参加者”の実施頻度の向上、②「未経験」層のうち“希望派”の旅行促進、③「休眠」層の活性化、が必要となる。本研究によると、“希望派”が存在するのは「独身子どもなし」のライフステージが中心であり、既婚者となるとその比率は限られたものとなっている。このことから、海外旅行者数の拡大を目指すのであれば、「休眠」層、中でもその多くを占める、過去に海外渡航経験のある“消極派”に着目していく必要があるのではないか。本研究ではこのグループの特徴の一角を示すことができた。海外旅行に対してネガティブな評価をしているわけでも、個人内阻害要因を知覚しているわけでもない。ライフステージの関係上、構造的阻害要因と対人的阻害要因があるために、海外旅行に動機づけられていない状況なのである。この特性を認識した上で、対処策を打っていくことが政府や旅行会社に求められると考えられる。

5 今後の研究課題

今後の研究課題として次の3点があげられる。第1に、今回は、ライフステージの影響、経験や実施頻度による影響を別個に切り離して分析を行ったが、二要因の分散分析を行うなどして、どちらの要因の影響が大きいのかについても検証していくことが求められる。

第2に、より日本の実情にあった実態を分析するために、ライフコースによる影響を分析することである。中村・西村・高井（2014）の若者を対象とした分析では、独身で非正規雇用の立場にある若者と、社会人、学生との間では、海外旅行の実施状況や参加意向、阻害要因の知覚の程度が異なることが示された。現在において非正規雇用の立場にある人たちが相当数存在することを考慮した分析の必要がある。ただし、これにより調査回答者を細かく分類してしまうと、各層の人数が少なくなってしまう、統計的な分析にあたっての適切さを考える必要が発生する。

第3に、年齢の進行と消費者行動の関連を分析する際の切り口として用いられる、加齢効果（aging effect）、継続効果（continuity effect）、時代効果（period effect）、コホート効果（cohort effect）が日本人の海外旅行行動に及ぼす影響を検討することである。加齢効果とは、年齢の上昇に伴う身体面や意識面への影響のことを言う。具体例としては、老齢期を迎えての身体能力の低下や意識の保守化などがあげられる。一方で、中年期頃までに培ってきた価値観や生活行動が高齢期にわたって継続されるとするのが継続効果である（Chen, 2014）¹¹。時代効果とは、特定の歴史的出来事が人々に与える影響のことであり、経済の低成長、バブル、不況などのほか、パソコンやスマートフォンの普及なども含まれる（電通シニアプロジェクト, 2014, pp. 40-41）。コホート効果とは、ある特定の歴史的出来事を特定の年齢で体験した人々（コホート）が類似の価値観を持つことによってもたらされる効果のことである。

海外における複数の世代の旅行行動を分析する先行研究を見ていくと、加齢効果よりも、コホー

ト効果と継続効果が認められることを示すものが支配的である (You and O’Leary, 2000; Lohman and Danielsson, 2001; Lehto, Jang, Achana, and O’Leary, 2008)。同じ年齢, ライフステージであっても, 世代が異なると同じ旅行パターンになるとは限らないとの見解となっている。ただし, Chen & Shoemaker (2014) は, シニアツーリストについては, コホート効果よりも加齢効果のほうが有効であり, 加齢が進んでいくと, コホートの違いに関わらず同質化していくとの分析を示している。

現在の日本人の海外旅行を分析する場合, 40歳代後半の人は, 年間海外旅行者数が1000万人に達しようかという時期, いわゆる1980年代後半のバブル期に若者時代を過ごしている。一方, 30歳代の若者は“氷河期世代”, さらに20歳代の若者が“さとり世代”と呼ばれるなど, 世代による違い, 時代による違いも想定される可能性がある。ライフステージによる影響だけではなく, これらの影響も検討することが必要である。

謝辞: 本研究はJSPS科研費25501017の助成を受けたものである。

注

- 1) 例えば, 25-29歳の女性の出国率を見ていくと, 1996年には34.2%であったが, 2008年には24.4%となり, 約10ポイント低下した。20-24歳の女性についても同様に, 28.7% (1996年) から21.5% (2008年) と低下する状況が見られた。単に若年人口が減少したのではなく, 出国率が低下している状況に着目し, このような事象を「若者の海外旅行離れ」と位置づけた。
- 2) 表1は, 法務省の『出入国管理統計年報』, 総務省の『人口推計 (各年10月1日現在)』の各年版の数値を用いて作成した。
- 3) 調査対象者は, 当該年に海外旅行を実施した人となっている。
- 4) ライフステージ, ライフサイクル, の定義については以下を参照した。
濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘 (編) (2005) 【新版増補版】社会学小辞典 有斐閣, p. 73, pp. 612-613.
- 5) ここで, 子どものいない人について独身者 (single) とカップル (couple) を区分しなかった理由として, 1人あたりの裁量所得を考えていくと, 独身者とカップルでは同程度の金額であることをあげている。
- 6) 婚姻状況と子どもの有無で類型化していくと, 「独身子どもあり」「離婚子どもなし」「離婚子どもあり」が出てくることになるが, 十分なグループの大きさを確保できないことから, 分析対象から除外した。
- 7) 生涯の渡航回数においては, 「未経験」の1166名を除いて一要因の分散分析を行った。過去5年間の渡航回数では, 「未経験」「休眠」の2062名を除いて一要因の分散分析を実施した。
- 8) 「とてもあてはまる」(5点), 「あてはまる」(4点), 「どちらでもない」(3点), 「あてはまらない」(2点), 「全くあてはまらない」(1点) として得点換算した。海外旅行への関心, 阻害要因も同様に処理した。
- 9) 例えば, 「なんとなく海外旅行に行く気分になれない」では, 賛同する人 (=行く気分になれない人) を1, 賛同しない人 (=行く気分になれる人) を5となるように数値変換を行った。
- 10) 「個人内阻害要因 (intrapersonal constraints)」とはストレスや不安, 自己のスキルに対する知覚などの個人の内部に生じる心理状態を指す。「対人的阻害要因 (interpersonal constraints)」とは, 一緒に参加する同行者に関する要因であり, 例として一緒に参加する適切なパートナーが存在しないこと, パートナーとのレジャーへの選好があわないことなどがあげられる。「構造的阻害要因 (structural constraints)」とは, 季節や天候, 利用機会といった特定の旅行に行くにあたっての諸状況などの外的な要因, 参加者の家庭内でのライフサイクル, 経済状況 (お金), スケジュール (時間) などが含まれる。
- 11) 以下のサイトを参考にまとめた。

Kowalczyk, D. (2015) Psychosocial Theories of Aging: Activity Theory, Continuity Theory & Disengagement Theory, Education Portal, <<http://education-portal.com/academy/lesson/psychosocial-theories-of-aging-activity-theory-continuity-theory-disengagement-theory.html>> (2015年1月4日閲覧).

前田展弘 (2010) QOL向上 / より豊かな長寿の実現に向けて④「自分らしさの継続 (継続理論)」, QOL Lounge, 2010年3月2日, <http://119.245.214.20/x/QOLstudy/modules/weblog/details.php?blog_id=69> (2015年1月4日閲覧).

参考文献

- エイビーロード・リサーチ・センター (2010) 海外渡航構造調査2010, 株式会社リクルート, 2010年5月12日, <http://www.ab-road.net/research_center/release/misc/pdf/20100511_03.pdf> (2014年12月30日閲覧).
- エイビーロード・リサーチ・センター (2014) 海外旅行調査2014: 2013年海外旅行者の選択プロセス・評価と今後の意向, 株式会社リクルートライフスタイル, 2014年6月18日, <http://www.ab-road.net/research_center/release/misc/pdf/20140618_01.pdf> (2015年1月2日閲覧).
- 青木幸弘・女性のライフコース研究会 (2008) ライフコース・マーケティング 日本経済新聞出版社, pp. 51-89.
- Bojanic, D. C. (1992) A look at modernized family life cycle and overseas travel, *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 1(1), pp. 61-79.
- Chen, S. C. and S. Shoemaker (2014) Age and cohort effects: The American senior tourism market, *Annals of Tourism Research*, 48, pp. 58-75.
- Crawford, D. W. and Godbey, G. (1987) Reconceptualizing barriers to family leisure, *Leisure Sciences*, 9(2), pp. 119-127.
- 電通シニアプロジェクト・斉藤徹 (2014) 超高齢社会マーケティング ダイヤモンド社, pp. 37-41.
- Hong, G. S., J. X. Fan, L. Palmer, and V. Bhargava (2005) Leisure travel expenditure patterns by family life cycle stages, *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 18(2), pp. 15-30.
- JTB総合研究所 (2014) JTB REPORT 2014: 日本人海外旅行のすべて JTB総合研究所, 78p.
- 公益財団法人日本交通公社 (2013) Market Insight 2013: 日本人海外旅行市場の動向 公益財団法人日本交通公社, pp. 8-28, pp. 49-52.
- Lawson, R. (1991) Patterns of tourist expenditure and types of vacation across the family life cycle, *Journal of Travel Research*, 29(4), pp. 12-18.
- Lehto, X. Y., Jang, S., Achana, F. T., and O'Leary, J. T. (2008) Exploring tourism experience sought: A cohort comparison of baby boomers and the silent generation, *Journal of Vacation Marketing*, 14(3), pp. 237-252.
- Lohmann, M. and J. Danielsson (2001) Predicting travel patterns of senior citizens: How the past may provide a key to the future, *Journal of Vacation Marketing*, 7(4), pp. 357-366.
- 中村哲 (2014a) 海外旅行の阻害要因の実証分析: 日本の“若者の海外旅行離れ”を対象として 玉川大学観光学部紀要, 1, pp. 1-22.
- 中村哲 (2014b) 海外旅行「消極派」の分析 第29回日本観光研究学会学術論文集, pp. 281-284.
- 中村哲・西村幸子・高井典子 (2010) 海外旅行の阻害要因の知覚に関する属性間比較 第25回日本観光研究学会学術論文集, pp. 209-212.
- 中村哲・西村幸子・高井典子 (2014) 若者の海外旅行離れを読み解く: 観光行動論からのアプローチ 法律文化社, 262p.

- 西村幸子・高井典子・中村哲（2014）海外旅行の実施頻度に関する動態的循環モデル 同志社商学, 65(4), pp. 337-363.
- Oppermann, M. (1995). Family life cycle and cohort Effects. *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 4(1), pp. 23-44.
- 高井典子・中村哲・西村幸子（2008）若者の海外旅行離れ「論」への試み 第23回日本観光研究学会学術論文集, pp. 421-424.
- 高井典子・中村哲・西村幸子（2013）観光行動の一般的意思決定に関する理論構築に向けて：「若者の海外旅行離れ」研究から観光行動の一般理論への展開 第28回日本観光研究学会学術論文集, pp. 345-348.
- You, X., and J. T. O'leary (2000). Age and cohort effects: An examination of older Japanese travelers. *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 9(1-2), pp. 21-42.

（なかむら てつ）

Effect of Life Stage on Implementation and Awareness of Traveling Abroad: An Analysis of Japanese Who Are Indifferent to Overseas Travel

Tetsu NAKAMURA

Abstract

The first purpose of this study is to clarify the relationship between life stage and implementation of overseas travel in Japanese. The second purpose is to identify characteristics of Japanese who are “indifferent” toward travel abroad. Many studies conducted in Japan and in other countries have explored the current situation of overseas travel, and have mainly found that family life stage is related to the decision to travel overseas as well as to travel behavior and spending. These studies have concluded that married couples without children and married couples with non-dependent children (empty nest) travel overseas often and spend a large amount of money. However, married couples with dependent children (full nest) are prevented from traveling abroad because of the lack of sufficient discretionary money and difficulty traveling with children. Not much is known about the awareness of overseas travel among Japanese who have weak intention of travel abroad. To expand the Japanese overseas travel market, which has not grown in the past twenty or so years, it is necessary to understand the thought process of persons indifferent to overseas travel. In this study, an Internet survey regarding overseas travel was conducted in March 2013. A total of 3069 young and adult Japanese respondents completed the survey.

Respondents were categorized into four groups based on their past experience and intention toward traveling abroad: “participants (strong intention and past experience of travel),” “positive (strong intention, no experience),” “indifferent (weak intention),” and “negative (no intention).” Results indicated that over 40% of respondents were indifferent, while over 30% of respondents were negative, 18% were participants, and 4% were positive. The indifferent group was further divided into subgroups, comprising “active”, with travel experience in the last 5 years, “interrupted”, with travel experience but not in the last 5 years, and “inexperienced”, with no overseas travel experience. Most indifferent respondents who were married with dependent children were found to be in the interrupted subgroup; however, many single indifferent respondents were in the inexperienced subgroup.

Second, the awareness of overseas travel among indifferent respondents was analyzed using data about past overseas travel evaluations, current interest in overseas travel, and constraints on traveling abroad. For both the active and interrupted subgroups of indifferent respondents, there were significant differences between life stages. In particular, respondents married with children had positive impressions from past overseas travel and interest in traveling abroad; however, they perceived structural constraints (lack of money and/or time, family situation, etc.) and interpersonal constraints (difficulty in finding travel companions) discouraging them from travel. In contrast, single respondents without children evaluated their past overseas travel experiences and current interest lower than married respondents with children. Furthermore, the inexperienced subgroup had little interest in overseas travel and perceived greater constraints, and there were few significant differences in current interest and constraints on overseas travel between life stages among members in this group.

Finally, the practical implications of these results for the travel industry and topics for future research are discussed.

Keywords: tourist behavior, overseas travel, quantitative research, life stage, indifference